

第4期第2回産業振興会議議事録

日時：平成27年11月30日（月）16:00～18:10

会場：帯広市役所10階 第5A会議室

【出席者】

■委員：兼子賢（会長）、河西健一、河野洋一、貴戸武利、佐藤憲、佐藤聡、志子田英明、高原淳、田中克宜、外山隆祥、松本健春、眞鍋憲太郎（全員出席）

■相談役：岩橋浩

■オブザーバー：岩本聖史、植松秀訓

■帯広市：中尾啓伸、小野真悟、黒田聖、前川光正、加藤帝、松本俊光、後藤兆延、毛利英孝、森田昇吾、尾澤琴也、山内優雅、藤芳雅人、高田敦史

（敬称略）

【当日提供資料】

- ・資料1 帯広市まち・ひと・しごと創生総合戦略（原案）
- ・資料2 「混血型」事業創発の促進
- ・資料3 帯広市の企業立地に関する優遇制度
- ・参考資料 （一財）商工総合研究所 調査研究事業報告書（岩橋相談役の提供）

1. 開会

■開会、会長あいさつ

- ・今期会長を仰せつかった。至らない部分もあるが、2年間よろしく願います。

2. 協議

①副会長の選任

兼子会長：前回会議で会長一任を得た。今回正式に決定したい。松本委員、眞鍋委員を指名したい。意見、質問などあるか。

一同：なし。

②総合戦略における産業振興ビジョン関連施策について

■事務局から資料1、3について説明

- ・この総合戦略は、「まち・ひと・しごと創生法」に規定された市町村の総合戦略に位置づけられる。十勝・帯広の強みや魅力を最大限に活かしつつ、安心して住み続けられ

る環境を確保し、地域の持続的な発展を図るために策定される。

- ・ 10月下旬に各委員を訪問した際は、この戦略の骨子を説明した。10月29日の総合戦略推進会議や11月20日の市議会総務委員会での議論を経て、この原案が作成された。本日はこのうち、産業振興ビジョン、産業振興施策に係る部分について説明し、意見・質問をいただきたい。
- ・ 産業振興ビジョンに基づく施策の中から特に人口対策に資するものをピックアップして盛り込んでおり、産業振興ビジョンと同じベクトルになっていると考えている。
- ・ 4ページは戦略の基本目標。基本目標は4つ。産業振興に関わるものとしては、(1) 新たな「しごと」を創り出す、(2) 十勝・帯広への「ひと」の流れをつくる が該当し、それぞれ数値目標が設定されている。
- ・ 続いてこの2つの目標に対する取り組みの方向性。「新たな『しごと』を創り出す」ではP6～8。P6では、(1) 地域資源を活かした産業振興として、農業分野も含めて①～④の取り組みを掲載。十勝ブランドの展開・促進や事業者と試験研究機関との連携はビジョンにも掲載されている。
- ・ P7は地域産業の競争力強化として、新たな事業の創発をはじめ、地元中小企業の積極的な取組をこれまで同様促進していくとともに、投資促進への支援制度の見直しや工業用地の整備を検討していく。
- ・ 資料3の「帯広市の企業立地に関する優遇制度」では、現在、新規・増設等に対して補助金や固定資産税の減免制度を設けているが、工業用地が限られている中、支援対象エリアが工業系用地に限定されていることや、更なる投資促進のためのインセンティブが必要と思われるなど、今後、見直していく部分があるのではないかと考えている。この会議でも意見を伺っていきたい。
- ・ P8では、産業人の育成ということで教育部門の取組と併記されている、現在実施しているフードバレー人材育成事業や十勝人チャレンジ支援事業等により、次代のリーダー人材の育成を引き続きすすめていく。
- ・ P9～11が、「十勝・帯広への『ひと』の流れをつくる」という目標に対する取組の方向性。P10の「移住・定住の促進」の中で、若年者の早期離職対策やU I J ターンの促進を示している。
- ・ P11の「地域特性を活かした“十勝観光”の展開」では、各種体験・滞在型観光の推進やとかちむら、幸福駅など観光拠点の機能強化やインバウンド増加に向けた取組を示している。
- ・ 以上が、取組の方向性。最後に P18 からの「価値共創」プロジェクト。いわゆる重点施策。これまで記載した取り組みの方向性に沿って、十勝の事業者や域外の事業者も含め、十勝の「稼ぐ力」を強めるためのプロジェクト。
- ・ P19に4つのプロジェクトを記載している。輸出促進拠点の形成、日本トップクラスの「食」のブランドづくり、「混血型」事業創発の促進、プレミアムなライフスタイルの

提案 の4つ。

- ・特に、プロジェクト3の「混血型」事業創発の促進については、ビジョンに記載の創業・起業支援の具体的な取組として検討してきた。

■事務局から資料2について説明

- ・8月17日の産業振興会議で、創業起業支援でのこれまでの議論経過や方向性、想定される取り組み内容について説明した。10月下旬に各委員を訪問し、総合戦略の骨子イメージと創業起業にかかる取り組み案について説明した。配布した資料2「価値共創プロジェクト3 混血型事業創発の促進」の資料にある現状、課題について、各委員も理解いただいたと考えている。
- ・今回は創業企業支援のとりくみをもう一步踏み込んで説明する。10月の訪問による説明で事業創発の総合コーディネート機能、ハブ機能の整備、企業家育成プログラム、スタートアップ資金提供、地域商社機能の整備、試験研究機関の充実の5点を挙げた。これらで十勝帯広の課題を解決し、新たな事業が継続的に創発される十勝イノベーションエコシステムの構築を考えている。
- ・今年度、人材混血型事業創発として、とかちイノベーションプログラムを行った。地方創生の主役は地域の起業家であり人材であるが、イノベーションは異なる領域の異質な人材との触発、混血から生まれると考えられ、日本全国で革新的なビジネスを展開している経営者、革新者と企業や事業の発展に向けて意欲あふれる十勝の起業家、事業者等が触発しあうことで十勝に新たなビジネスが生まれることを目指した。
- ・域内外の資源や人材が触発され、様々な事業の種が生み出された。今後、企業家育成プログラムの実施により、若者や女性を中心に企業家としてのマインドを醸成し、次年度以降の実施を協議しているイノベーションプログラムの新たな参加者や新事業の挑戦者を育成していく。
- ・生まれた事業の種は各分野の革新者や専門家等の先進的知見により、事業計画として磨き上げ、新しい価値を載せた具体のチャレンジ案件として事業に昇華させ事業創発につなげる。
- ・これら一連の流れを継続し、事業創発を生み続けるためのプラットフォームとして、地域内外のヒト、モノ、カネを結びつける段階別の総合コーディネート機能、すなわちハブ機能の整備を行う。以上を全体像として、十勝イノベーションエコシステムを構築しようとするもの。
- ・このエコシステムを地域全体に根付かせ、成長しつづけることで新たな仕事を生み出し続け、持続可能な地域に留まらず、永続的に発展して行く地域を目指す。ヒトがチャレンジを、チャレンジがヒトを呼び込む好循環を生み出し続ける地域にしたいと思えます。

■事務局

- ・総合戦略（原案）は12月からパブリックコメントが実施される。会議の意見も必要に応じ集約し、総合戦略策定に活用する。

■会長

- ・松本委員が総合戦略策定のメンバーでもある。今日総合戦略を初めて目にする方も多いと思うが、コメント、疑問点等あれば順次いただきたい。

■委員

- ・子育てサポートの部分で、保育所の開所時間。専業主婦であれば良いが、共働きで農家だと時間が合わない。農村特有の課題でもあるが……。知り合いだが、町まで出ている人もいる。農村地域では農家の嫁は専業主婦になる傾向が強い。
- ・ふるさと給食でもっと地元の農産物を入れられないか。
- ・市や農協でやる農協青年の婚活支援。もっと共同作業的なものをいれて深い係わり合いを作らせてほしい。

■会長

- ・働く女性の子育て、食育、婚活支援、どれも大きくて重たいテーマ。事務局から総合戦略に絡んでいる部分について何か。

■事務局

- ・人口減少社会の中でいかに労働力を確保するかが課題。特に女性の労働力。

■委員

- ・「農家＝家に入る」というイメージが強すぎる。

■事務局

- ・一般の共働き家庭より、外で働くという理解が進んでいないのか。

■委員

- ・その雰囲気を作られるのは農家が忙しいから？

■委員

- ・女性自身がそう考えることも多い。

■委員

- ・冬にちょっと時間ができたときに、地元の食品会社で働くというプログラムもできるのでは？日配品は年末年始が忙しい。農家の人も1年通じては働けないけど、年末少しだけというならOKでは。2次産業を体験してもらうプログラム。

■委員

- ・農業者と町の人、特にサラリーマンや商工業者との交流が基本的に少ない。何かしようと思っても農業者と強いつながりがなく、感覚や生活実態がわからない。農業者との交流も戦略に含めては。文化的な交流というか生活まるとの交流があってもいい。戦略なのでそういう位置付けも必要。

■会長

- ・うらほろスタイルのように、農業者のスタイルを発信した方がいいということ？

■委員

- ・農業者ももっと寄らないと。互いの理解が大事。

■委員

- ・戦略の方向性はいいが疑問として。H25、26の基準値にH32までの目標があるが、その設定が高いか低いか分からない。
- ・資料3（企業立地の優遇制度）、本当にこれで魅力あるのか？他の町村はもっと高い優遇策がある

■事務局

- ・ベースとなっているのは総計や産業振興ビジョンに数値があるものはそれを置き換えた。総計に数値がない HACCP 導入企業数などは新たに設定した。高いか低いかは、これまでのトレンドを見て、順調に推移すればこれくらいだろうと設定している。
- ・企業立地については、3月議会に向け条令改正の検討を進めている。色々ご意見いただきたい。
- ・周辺3町に対し見劣りしているとは考えていないが、道内10市では、例えば函館は雇用を生まなくても投資が一定額なら補助、釧路は地代も含めて投資額としている。こういうところと競争するにはどうしたらいいか検討をしていく。
- ・支援制度を使えるのが工業専用地域だが、完全な更地がほとんどない。このしほりを若干緩められないか将来的に検討必要、今回意見いただければ。

■委員

- ・食品関係の企業が多いので、広い土地求めている。実際には帯広市内では新たに工業

団地を作らないと入ってこれないという現状。ここを考えていかないといけない。

- ・融資制度。本来なら市中金融機関で考えていくが、もう少し手を広げれば日本政策公庫などもいろいろ制度融資持っているの、もう少し帯広の金融機関に限らず誘致するにはいろんな手を使ってはどうか。
- ・目標値。H31の目標値ができるなら、年度ごとの目標値を出して見直しできる形で最終目標でなくて段階的に見直せるようにしたほうがいいのでは。過去のを参考にしているので、例えば輸出など、TPPの関係で増えていかざるを得ない。後から出てきたが原産地証明はTPP始まると大量に出る。そうなると輸出も増える。

■委員

- ・方向性としては分かりやすい。価値共創プロジェクトの「十勝の稼ぐ力を極大化する」というのに言葉的に違和感が少しある。
- ・テーマ1とプロジェクトの1～4までがどの位関連しているのか少し疑問に残る。
- ・「稼ぐ力を極大化する」は付加価値を拡大していくという認識でいいか。
- ・プロジェクト4「プレミアムなライフスタイル」、これはアクティブシニアを中心にゆとりある生活と癒しの中でのというイメージだと思うが、本当は若い層の人たちに来てもらうというイメージで捉えなおした方がいいのでは。
- ・アクティブシニアと稼ぐ力の極大化が繋がらないので、付加価値を高めて行くということで考えて行くと、能力をもっていてかつ十勝から流出してしまった人材を取り戻すとか、まったく別な地域で活躍した人を呼び込むとかの施策が増えた方が十勝の発展につながるのでは。
- ・十勝に惹かれてやってくる人は単に自然だけでなく、多様な価値観やライフスタイルを思い描いていると思うので、調べて市の計画に反映させては。

■委員

- ・価値共創プロジェクトの「稼ぐ力」。私も似たような違和感を持つ。誰に向けて言っているのかあいまいな部分ある。中小企業として各企業がこれをみたとき、何をどうしたらいいのかという部分が分かりづらい。産業振興という面でピンとこないところもある。トップランナー的なところならこの指摘はかなりあたっていると思うが、町場で営業している小さな店はどうすればいいんだと。視点として小さなところを含む持続的な政策も強調されるべき。
- ・P6の地域資源を活かした産業振興など、この辺を強調して十勝の地域資源とは何かも含め、全体の経済循環の強化をしていくあたりの表現が大事では。

■委員

- ・産業振興と新規の産業創出という2つで話を進めていかないといけない。企業立地に

関して、外から企業を迎える部分の制度は他町村に対し見劣りしないとのことだが、既存の企業、特に中小企業に対する支援では、正直帯広市は他の町村より劣っていると感じている。利子補給が無いのが一番の大きな要素。

- ・ 3年前に遡るが、他町の制度融資が帯広市と違って毎年見直しをかけておらず、かなり以前に施行された制度がそのまま改正されずに残っていたがために、使えない制度になっているのが判明した。
- ・ 1年掛けて行政側と話し合いをして、まるごと新しく生まれ変わった。結果、町内2行の金融機関で制度融資残高が改正前の6倍を越えた。制度がよければ使う人がある。
- ・ 他の町村よりいいものというより、今の時代に合うものを作った。昔からの制度融資を今の時代にそぐわないものをカットしただけ。
- ・ 1つ例を挙げると、制度融資の上限金額は変えていないが、運転と設備の枠を取り払った。企業によって運転資金需要が盛んな企業と、設備需要が旺盛な企業があるので、枠組みを作ることで不公平という考え方から。担保や保証人も本来は行政が決めるべき話でなく金融機関で決めるべきものが、条例の中に入っていて使いづらい制度になっていた。利子補給も2.0%以上の部分を補給するとなっていたが、実質の出来上りの金利が2.0%未満であったので、実質の町の支援は一切無かった。
- ・ ちょっと変えるだけで需要さえあれば利用率は高くなる。新規産業の創出、企業立地の費用（の手当て）はそれほどしていない。既存の中小企業の産業振興という面では大きな影響を与えた。
- ・ 外から企業を呼び込むことは一気に雇用が増えるなど即効性の魅力はあるが、時間がかかっても地元の企業を育成するという観点が戦略の中であっていいと思った。
- ・ 当金庫も人材確保が厳しくなっているが、何が原因なのか。我々は自分たちの良さも悪さも気づいていないのだろう。特に学生側から見たとき、帯広の何に魅力を感じて何が足りないと思うのかをきちんと調査しているところはあるだろうか。調査分析しないと対策はとれない。まず現状分析しないと。

■事務局

- ・ 連続して同じような質問があったので・・・総合戦略を作るという意味合いをたどるが、結局国としては地方に頑張ってもらいたいということで、努力義務として、地方が競い合う形とする中で作っていった。価値共創プロジェクトは実は内部でもすごくもめた。これをどういう位置付けにしようかと。既存の企業に対してもしっかりした支援をしていくというのはもちろんベーシックなところにある。かといって国にしっかりとアピールしていくことの、市長がよく言うエッジを効かせた、尖った分野を帯広市としてどう見せて行くか。ある程度横串をさして重さを持った共創プロジェクトを作ることで裾野を広げて行くという作戦もありということで作っていった。そういう意味で「稼ぐ力」、「極大化」という言葉を使った。

■委員

- ・市役所の頭の回転のいい方が作られ、粗相のないきちっとした資料という感じ。
- ・やはり価値共創プロジェクトが気になる。「十勝の稼ぐ力」というよりも、自分が動いている感覚から行くと「十勝で稼ぐ」という方がしっくりくる。
- ・農家の規格外商品をなんとか金に換えようと、商業ベースに乗せるためにペースト状や粉にするとかやっている農家も結構いる。その処理する工場が十勝管内にないというのが農家が嘆いている。
- ・資料3の企業誘致。日本全国の地域で企業誘致をしている。何の特色もなく出すと、優遇措置の競争になる。食に関連する人は十勝に来てというように、地域特性や優位性を出さないといけない。
- ・プロジェクト2 畜大が HACCP の専門家を育成して地域に貢献する大学になると宣言している。畜大との連携強化を進め、十勝は食品衛生に関してメッカであるという位置づけをするにはどうしたらいいかということまで踏み込んでみてはどうか
- ・プロジェクト3 「混血型」という言葉が分かりにくい。
- ・プロジェクト4 中央で「食と景観の～」というのが確か出ている。中央は自分たちが出している方針と違うことするのはすごく嫌うので、うまく取り合わせを考えた方が中央受けするのでは。
- ・人口減少対策の観点からものをすすめるが、地域の人口減少に対する危機感が少ないので、その点をもう少し啓蒙し、移住振興と定住振興をきちっと分けて進めるべき。

■委員

- ・P6の十勝産機能性素材を活用した新製品開発。十勝産機能性素材はいまどれくらいあり、H31までに何素材くらいになるか。
- ・食品は産地が出せるが、機能性素材はあまり産地で売れているものはみたことない。フランス産マツの樹皮のピクノジェノールくらい。十勝産の機能性素材と言ったときにそれが売れるのか？
- ・P11、国際チャーター便の運行数が増えると、とかちむら産直市場の売上金額が増えるというのが大きくかわると思って質問しているが、産直市場に英語での説明が特にない。分からないものには手を出さないというのは結構多い。外国人に分かりやすい売場づくりの取り組みはあるか。
- ・総合戦略にもう少し遊びを入れてほしい。香川県のうどん県は有名。愛媛は愛という字で愛知と間違えられることから「愛知でなくて愛媛だよ」というキャッチを出した。思わず笑わせるような十勝のキャッチフレーズがあったらいいと思った。
- ・Uターン、Iターンの話。慶応の先生が学生を連れて十勝を回った。最後に交流会したら学生から「十勝を見る目が変わった」「中小企業って面白い」って声をもらった。こ

ういう外の学生に理解してもらおうのもそうだが、地元の学生に対してあれば。

- ・食育を小学生相手にしているが、狙いどころは子供が成長して十勝を離れたとき、外で食品のことをよく知っているとなったとき、回りの人、十勝から来た子供たちを見た人は「この子食品のことをよく知っていてすごいぞ」と思ったら十勝の評価がその場で上がる。
- ・子どもも自分たちが食品のこと良く知っている、味が分かるということを知ったら、何割かはIターン、Uターンで戻ってくる。こういう打算的、計算づくな食育もあってもいいのでは。

■事務局

- ・機能性素材、これまでとち財団でABCプロジェクトでやってきた。ベタインだったり小豆のポリフェノール、ポテトペプチド、チコリからのイヌリン、3月にフジッコさんと包括連携協定を結んでいて、大豆の葉からピニトールという成分がとれる。糖尿や血糖値を下げる効果がある。機能性素材ということではこういうのを想定している。
- ・13商品は、これから5年間に年間2〜3件商品化すれば13くらいということで設定した。

■会長

- ・アイデアの数、商品の数？

■事務局

- ・商品として売れるもの。きちんとした商売のベースに乗り、消費者の口に入るもの。

■委員

- ・P6のKPIの数字は十勝管内？

■事務局

- ・モノにもよる。帯広市でというより、帯広市が関わった数というのが正確な捉え方。例えばHACCPも畜大との連携の中で市が関わっていたらカウントするが、まったく関わっていない企業が取得したら数えない。

■委員

- ・地域資源や特性、魅力などどこをベースに考えているのか。
- ・混血型事業。今私は「十勝カレッジSILO」をしているが、学生が起業したいとなるとどこに相談したらいいか。具体的なプロセスも付け加えるのか。

■事務局

- ・やはり十勝というスケール。総合戦略は行政区域ごとに作ることにしているが、気持ちとしてはそういうこと。

■事務局

- ・混血型事業。相談は、ハブ機能と書いているが、総合コーディネート機能をこれから検討していくことになる。当面は市につないでいく機能があるが。

■委員

- ・資料2、混血型事業創発はP19のプロジェクト3「とかちイノベーションプログラム」で地域外の人との接点を求めるとあるが、これが混血ということか。
- ・P9、ライフスタイルの提案というのはとても大きいことと思うが、P19のプロジェクト4が関連していると思うが、プレミアムな時間を提供して、ライフスタイルを求める流れで関連産業の創発を求めるといふ流れだろうが、人がいる場所を作るのか、来るようにするのかどっちか？

■事務局

- ・イノベーションプログラムは7～9月にかけて帯広信金、道銀、北洋銀を中心に70人ほど集まってグループで事業創発の議論をしてもらった。外からの新しい視点を取り入れる中で最終的に10の事業提案があり、うち2つは革新者と呼ばれる域外の人との発想。今後もこの流れを続ける。

■事務局

- ・今までの食・農業の枠組みから少し抜け、自然、景観など海外に負けないくらいのワールドクラスのものをもっている。これらをブランディングしていけないかと。具体的にはアウトドアに特化した魅力を発信したい。
- ・基本的に来て貰うことを目指している。富裕層の方に、都会では味わえないキャンプなどを通じて全国的なブランドにしていきたい。

■会長

- ・アクティブシニアがキーポイントと思われる。シニアの富裕層ということか。

■事務局

- ・アクティブシニアは元気な高齢者という意味で書いた。これだけでなく、富裕層ももちろんターゲットにしている。

■委員

- ・実際にこちらに来ている人の数は把握できているのか。

■事務局

- ・分からない。

■委員

- ・定住のイメージか。

■事務局

- ・違う。

■委員

- ・新得がかえで団地を別荘地として破格で作って全部売れた。今は定住地になってる。冬はスキー、夏はゴルフを楽しむ富裕層らが。最近では中札内でも同様に、定住になってきていると聞く。本州の人は北海道の家の設計を知らないから、こちらの業者を使ってくれる。
- ・寒さを敬遠すると考えがちだが、この寒さを知らない人にとってみると魅力。武器になる。

■委員

- ・うちの客で茨城の人が家を探してという人がいた。その人は商売をやっていて息子に譲ったそう。息子たちもよく来るそうだ。若者世代が十勝を離れるというが、その世代でもこちらに魅力を感じて来る人もいる。
- ・十勝の良さに自信を持っていいのでは。こちらの冬がいいという人もいる。スキー場は最高。こちらに来たい人に来て貰うという焦点を絞った取り組みもいい。

■委員

- ・「混血」という単語。「開拓」という言葉を使わないようにするということがあるが、「混血」という言葉は厚生労働省でも使わないようにしている。「混血」という表現は控えたほうがいいのでは。
- ・P4の目標値。手堅い数字でとっくに超えそうな数字。
- ・P5の子育て応援事業所。事業所の数が増えればいいのか、それを利用する人の数が増えた方がいいのか。事業所の数より子どもの数の方が分かりやすい。
- ・P7の企業誘致とか、P16の他の地域からこちらに住むというもので、少し地域にかか

っている法的な網掛けが厳しいのでは。町自体はコンパクトシティとっているが、少し離れると法的な縛りが厳しすぎる。中札内とかが増えているのは、こういうところ（法的な縛りの面が帯広よりゆるい）では。

- ・P13の不登校からの復帰。目標値が65%だが、100%にすべきでは。実現できるかは別として、目指すところはそこでは。
- ・P19 プロジェクト4 プレミアムなライフスタイル。外の人が豚丼を食べるときに、地元の人にどこの店がいいか聞いたら、豚丼は家で食べるもので店は知らないということがよくある。地元の人にも体験する機会を作らなければ、プレミアムなという取り組みを進める上で、地元に応援してもらえない可能性もある。

■事務局

- ・「混血」のイメージ。この地域のよさを外の人視点や知見を混ぜ合わせて新たな発想を生むということだったが、この熱意で（ネガティブな）印象を覆えるか省みて考える部分はある。

■委員

- ・戦略会議に参加して、各委員から言われたようなことと同じ意見があった。そもそも論はこのままだと地域が無くなるからアイデア出せよということだと思う。2025年までに出生率上げろとか交流人口増やせというのは大きな課題。若い人をどう入れさせるか、どう交流人口を増やすか。観光で来た人が定住してもらい形を整えるかということと、退職した人たちがここに住めるようないい環境を作れるか。それがこの地域の人口を増やして行く。大きな目標はそういうこと。
- ・市の総合計画があつて、それをベースに戦略会議があつて、その下に振興会議があるわけではなく並列と言われた。総合戦略会議で様々な戦略を練って、ではどこか実行に移すのかとなったときに、多分産業振興会議が具体的なことを練ってやるのだから、その下に位置付けされるのか聞いたら並列との話、その辺があまりしっくりいってない。
- ・価値共創。総合戦略会議の中でも議論されていない。委員から何も議論が無かった。カタカナが多すぎて何のことか分からない。
- ・「十勝の稼ぐ力」。はじめは帯広だったが十勝にした。
- ・地域間競争。もっとほとぼしするような気概を持った文章にできないか。誰かが作ったような、市が作ったのか市長が作ったのか、某コンサルが作ったのか、多分そういうものがあるからこういう言葉になっていくと思う。できれば産業振興会議の中でもう少し帯広・十勝の言葉に置き換えたものにしていって将来を見据えるものにしないとうまくいかないのでは。
- ・会議所、同友会含め創業支援をやっている。その辺の他団体との連携をうまくしない

となかなか進んでいかない。どこがプラットフォームになるかもこれでは見えてこない。帯広市がやるのか、同友会か、商工会かを含めて役割分担をしていかないとこの通りにはいかないと思う。次回の産業振興会議で論点整理してもらって一つずつ議論して言ったほうが様々な人から意見は出るのでは。

■相談役

- ・P6、HACCP 導入企業数の記載あるが、学校給食共同調理場にも HACCP を導入してもらいたい。地域へのインパクトが大きい。市の施設で HACCP 導入を進める方向で進めて。
- ・給食の入札でくじ引きになった場合、HACCP を取得している企業が優先されるようにしてもらいたい。
- ・会社を作りたい人への支援はかなり充実しており、手を上げる人をいかに多くするかが地域の課題。

(以下は参考資料に関連して。資料は英国の中小企業政策。中小企業振興が地域開発政策と一体化され、学校教育の段階から起業家育成教育が組み込まれているという趣旨)

- ・EU や米国の企業率は10%ほど、日本は3%。
- ・英国は個人事業主が増えている。ベンチャーのような企業ではなく、地域に根ざした個人がやるような形態が多い。
- ・言いたいことは、産業振興会議メンバーに市の教育委員を最低でも2人入れてほしい
- ・理由は2つ。1つは起業家精神を醸成。産業界が教育に明確にコミットメントしており、法律がそれを担保している。もう一つは、日本の教員が授業以外に割かれる時間が多く忙しい中、起業家教育をやってくれと発信していくには教育委員に。
- ・中小企業振興基本条令を制定 10 年を節目に変え、条例に教育のことを入れてほしい。部分改訂でも全部改訂でもいい。
- ・TPP が大筋合意した中、後になって考えると、今が結節点と言われる時期なのかもしれない。今一度みんなで考えるのもいい。
- ・今回、自分が用意した資料ぐらいは行政（委員も）は用意しておくべき。ネットでいくらでも検索できる。でなければ議論は深まらない。